DVDの操作説明

メインメニュー

A ぜんぶ みる
順番にすべて再生されます。

B 各タイトルのボタン
それぞれのタイトルが再生されます。

C 音声・字幕切り替え
〈音声〉1.アイヌ語　2.日本語
〈字幕〉1.日本語　2.アイヌ語（カタカナ）
3.アイヌ語（ローマ字）　4.なし
初期設定では「アイヌ語音声・日本語字幕」です。日本語音声のみで再生したいときは音声・字幕設定画面で「日本語音声・字幕なし」を選択して下さい。

D 収録特典 お話まめちしき

各タイトルの豆知識、解説がご覧頂けます。

E 口承文芸視聴覚資料作成事業について
このアニメの目的など、本事業についての説明です。

アイヌのお話アニメ

オルシペ スウォプ5

あぶたのおはなし
私の育てた子グマ
-クコラ ヘペレ-

しずないのおはなし
ふうふのイナウがさらわれた
-ウムレク イナウ アテクサイカレ-

しらおいのおはなし
うさぎがはねた
-イセポ テレケ-

めむろのおはなし
空の上の雪かき
-カント オッ タ カシケ-

公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構（アイヌ文化財団）
The Foundation for Research and Promotion of Ainu Culture（FRPAC）

◆タプカラ（踏舞）というジャンル

アイヌ民族の舞踊の1つ。

カムイの魂を送る際に屋外の祭壇の前で踊られたり、祝宴に移ったのち、屋内で演じられたりする場合がある。

踊りは、一人ないし複数の男性が、両手を上に向けて広げたり胸を打ちながら足を力強く踏みしめるもので、横一列に整列したり、円を描くように回りながら舞う。また、男性の後ろに女性が付き添い、「ハウチョー」などといった掛け声を入れる場合もある。

渡島・十勝・旭川や樺太では様々な歌詞が歌い込まれるのに対し（タプカラシノッチャ）、日高西部では喉に力を込め低い声をふるわせ（サケハウ）、歌詞を入れることはタブー視されているなど、演じ方には若干の地域差がある。

◆本作品の原資料について

本作品の原資料は、洞爺湖町虻田の遠島タネランケ氏が語ったものである。同資料は北海道立図書館に所蔵されており、『知里真志保フィールドノート』（北海道立文学館所蔵）に収録時の概要が記載されている。遠島氏は、伝統文化の伝承者が少なかった虻田にあって、多くの研究者に協力して英雄詞曲や神謡、散文説話などの伝承を残した。本作品は、本来男性が演じる演目を女性が再現したものである。

アイヌ語の文章は語られた通りに活字化したが、文法的解釈などは編集委員会による。口演は椎名庵氏がおこなった。

◆アニメ化にあたって

本作は、全編が旅立つクマのカムイに向けた別れの言葉となっている。子グマを人間が預かって養育したのち、親兄弟が待つカムイの国に送り届けるというイオマンテの儀礼について理解を助けるため、導入部を子グマを家に連れ帰る場面からとして、春から夏、秋にかけて成長していく子グマの姿を描いた。

タプカラの動きは、1896（明治29）年にコンスタン・ジレルが胆振で撮影した映像を参考にしている。登場人物の服装は明治末に虻田で撮影された写真や、明石和歌助（エカシワッカ）旧蔵の木綿衣を参考にしたが、家屋や祭壇の細部、儀礼用冠へのイナウの結びつけかたなどは虻田での資料が得られなかったため、比較的近い地域のものとして、明治末～昭和初期に八雲・長万部で撮影された写真を参考にまとめた。

ふうふのイナウがさらわれた

～ ウムレㇰ イナウ アテㇰサイカレ ～

◆ユカㇲ（英雄詞曲）というジャンル

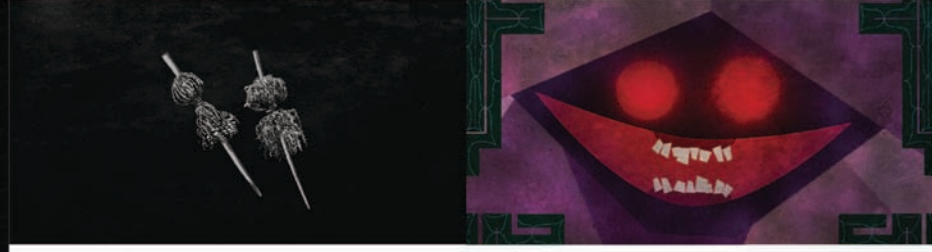
アイヌ民族の物語文学の1つ。

主に超人的な力を持つ人間が主人公となって、自らの体験を語る内容のものが多い。このユカㇲという呼び方は主に北海道の胆振や日高西部で用いられ、他の地域ではヤイラㇷ゚（様似）、サコロペ（北海道東部～北部）、ハウキ（樺太）と呼ばれている。日高地方でも、語り手によってオイナやハウと呼ぶ場合もある。

韻文形式で語られる物語で、語り手はいくつかのメロディをランダムに組み合わせて語る。レㇷ゚ニと呼ぶ短い棒で、炉縁などを打ってリズムを取ることが多い。

◆本作品の原資料について

本作品の原資料は、新ひだか町静内の葛野辰次郎氏（1910年～2002年）が語ったものである。同資料は北海道教育委員会によって録音され『昭和55年度アイヌ民俗文化財緊急調査報告書（無形民俗文化財6）』p9に概要が掲載されている。葛野氏は祈り詞をはじめ多くの伝承を筆録・録音によって残す取り組みをしており、同資料も一度筆録した物を読み上げて録音されたことがうかがえる。本作品は一種のイナウの起源譚であり、虻田町や平取町に類似した伝承が見られる。上記報告書および葛野氏が自費出版した『キムスポ』には、イナウの起源にかかわる別伝が収録されている。2つの伝承を比較すると、どちらもアイヌラックルを主人公とする物語だが、本作品の主題が盗まれたイナウの奪還であるのに対し、別伝ではアイヌラックル自身がイナウを携えて天下る展開になっている。アイヌ語の文章は語られた通りに活字化したが、文法的解釈などは編集委員会による。口演は橋本隆行氏が行った。



◆アニメ化にあたって

本作は、天界から人間界に男女一対のイナウが降ろされたとき、不埒な精神を持った戦の神がそれを盗み取る場面から始まる。男女一対のイナウは、葛野氏自身によって男性のイナウとされるもの（イラストでは左）、女性のイナウとされるものとして描いた。

戦の神の姿は、兜をかぶり、首や胸があり、下駄を履き、両手の爪で攻撃する所から人に近い姿をしたものと解釈した。装束に用いられるサラウネという言葉は、松脂によって小石や砂を付着させ装甲としたものらしい。アニメ化に当たっては岩のような鎧をまとった姿で描いた。平取町の伝承にも同名の魔神が登場し、片目は大きく片目は小さいといった姿で描かれる。ただ、静内地方の伝承でどの程度イメージが共有されているのか不明であったため、ここでは採用しなかった。

葛野氏の語るアイヌラックルは人間の始祖とされ、灼熱や極寒の環境に堪える強い生命力を持ち、本作のように空を飛んで魔神と戦う力を持った超人的な存在としても語られる。他地方の伝承ではアイヌラックルのいでたちについて色々な描写があるが、静内地方でアイヌラックルがどのようにイメージされてきたのか不明であったため、そのような描写は採用しなかった。

◆カムイユカラ（神謡）というジャンル

アイヌ民族の物語文学のひとつ。

主にカムイ（動物や植物、火や水、天候、道具など、人間の生活に不可欠なもの、人間の力が及ばないもののひとつひとつが「カムイ」で、多く「神」と訳される）が主人公となって、自らの体験を語る内容のものが多い。カムイユカラという呼び方は主に北海道の胆振や日高西部で用いられ、他の地域ではオイナ（北海道東北部～樺太）、トゥイタク（日高東部）と呼ばれる。主に女性が語るため、「女のユカラ」という意味のメノコユカラ、マッユカラと呼ぶ地域もある。

韻文形式で語られる物語で、短いメロディーにのせて、サケヘ（あるいはサハ）とよばれる繰り返しの文句を挟みこみながら語る。サケヘは、物語の主人公となるカムイたちの鳴き声や姿、性質や特徴などに由来すると考えられているが、意味がよく分からないものも多い。

◆本作品の原資料について

本作品の原資料は、白老郡白老町の宮本サキ氏（1881-1957）が語った神謡である。

同資料は全国規模の民謡調査の一環としてNHKが1947年9月4日に登別で収録した音声資料である。同じ神謡の一部を編集したものが『アイヌ歌謡集 第1集　アイヌ神謡　カムイ・ユカラ』（1947年刊行）に集録されている。

アニメ化にあたっては、未公刊音源を編集委員によって聞き起こし、テキストを作成した。口演は大須賀るゑ子氏が行った。

◆アニメ化にあたって

本作は、大きなウサギのカムイの物語である。舟で人間の村に近づいてくる病気のカムイ（＝青い霧）に気付いたウサギのカムイが、病気のカムイが村を襲う前に仮小屋で休んでいるところを、仮小屋に魔除けの力があると考えられるおしっこをかけて追い払ったという内容となっている。

ウサギのカムイはウサギの姿のままで描いたが、病気のカムイは語られている「青い霧」という霧状の形をしつつ、ほかの伝承において水玉模様の着物を着ていることが多いことをふまえ、顔や手足がはっきりしない水玉模様の姿で描いた。

◆オイナ（神謡）というジャンル

アイヌ民族の物語文学のひとつ。

主にカムイ（動物や植物、火や水、天候、道具など、人間の生活に不可欠なもの、人間の力が及ばないもののひとつひとつが「カムイ」で、多く「神」と訳される）が主人公となって、自らの体験を語る内容のものが多い。オイナという呼び方は主に北海道の東北部や樺太で用いられ、他の地域ではカムイユカラ（北海道南西部）、トゥイタク（日高東部）と呼ばれる。主に女性が語るため、「女のユカラ」という意味のメノコユカラ、マッユカラと呼ぶ地域もある。

韻文形式で語られる物語で、短いメロディーにのせて、サケヘ（あるいはサハ）とよばれる繰り返しの文句を挟みこみながら語る。サケヘは、物語の主人公となるカムイたちの鳴き声や姿、性質や特徴などに由来すると考えられているが、意味がよく分からないものも多い。

◆本作品の原資料について

本作品の原資料は、芽室町の中山トキノ氏（1882-1967）が語ったオイナである。同資料は、1961-1963年、日本放送協会札幌放送局が企画した「アイヌ伝統音楽収集整備計画」に基づく総合的な調査のなかで採録された音声資料のうちのひとつである。この音声資料は、日本放送協会（編）『アイヌ伝統音楽』（1965年、日本放送出版協会）に概要が掲載されている。アニメ化にあたっては、未公刊音源を編集委員が聞き起こしてテキストを作成した。口演は山本りえ氏が行った。

◆アニメ化にあたって

自叙者が誰であるのか、物語のなかで明言はされていない。原資料では中山氏による日本語解説のなかで「雪を降らせる化け物」であろうと述べられている。総じて、神の世界における姿は、火の神は赤い小袖といったように、神の特徴を反映するような色や模様のついた着物を着ているとされることから、自叙者は雪をイメージした模様の小袖を着た姿として描いた。一方のサマイェクルについては、原資料が伝承された地域において、どのような姿として語られるかといった資料が少ないこともあり、具体的な姿の描写をするのではなく、巫力が強いことをあらわす靄（もや）が体全体を覆っている姿として描いた。